

10-4 河原操子ガイド

1、操子（みさこ）の誕生とその環境



河原家は祖父の曾一右衛門以来、代々藩儒をつとめていた。父の忠（としな）は松本藩で子弟に教え、大叔父の忠美も会田町（現市内四賀）で家塾を開いていた。母しな子。一人娘として明治8年（1875）に生まれた。父は廃藩置県により失業、私塾を開き、漢学を教えていた。明治14年には板場支校（四賀）に招かれて教師となった。母は裁縫を教えており、「共働き」の家庭に育った。14歳の時母をなくし、以後父忠の手で育てられた。幼児期をこの四賀で過ごし、第二の故郷となった。

操子は父一人に育てられ、強く感化されながら成長していった。父忠は、「日本と中国の有効こそが東洋に平和をもたらす」という考えをもっていた。また、「国家百年の計は教育にあり」と考えていた。従ってこうした父の信念が操子の心の奥深くしみこんでいった。

父はシベリヤ単騎横断を成し遂げた福島安生（やすまさ）とは幼い時からの友達であり、生家も近かった。

2、操子の年譜

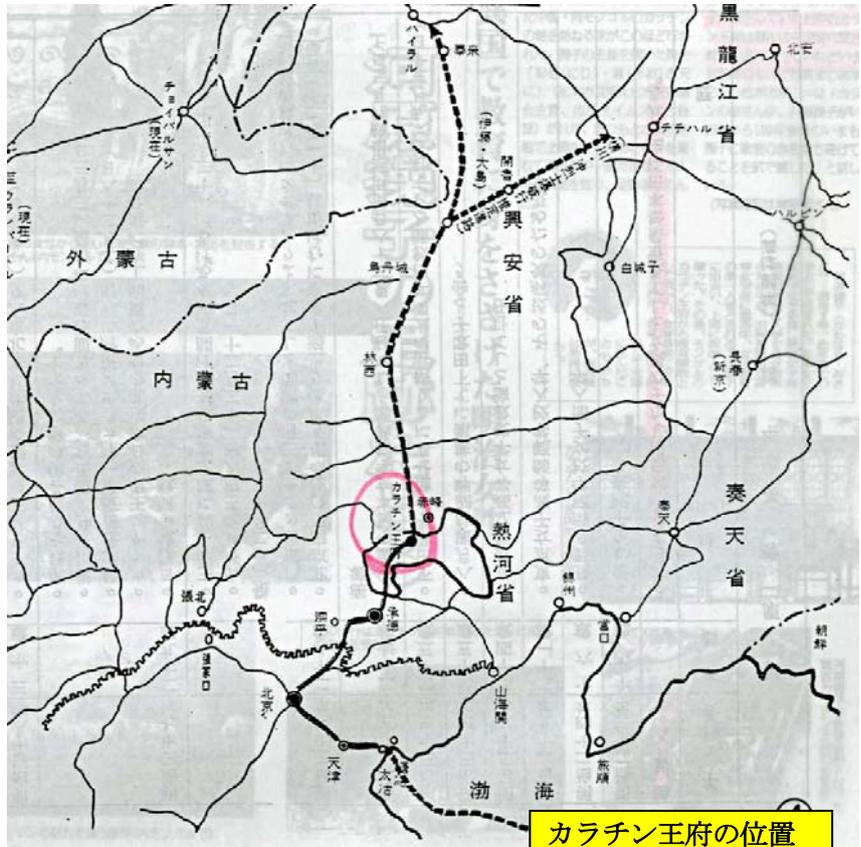
年号	年齢	略歴
明治 8年 (1875)		・ 6月6日誕生 父忠・母しな子の長女として誕生
全 19年 (1886)	11歳	・ 開智学校4年に編入
全 22年	14歳	・ 母しな子死亡
全 24年	16歳	・ 長野県師範学校女子部入学
全 29年	21歳	・ 東京女子高等師範学校入学（現お茶の水女子大学）県知事推薦
全 30年	22歳	・ 病気のため大学中退
全 32年	24歳	・ 長野県立高等女学校教諭として赴任
全 33年 (1900)	25歳	・ 8月19日講演旅行で諏訪を訪れた下田歌子と面会。清国の子女教育の希望を伝え、力を貸すことを約束された
全 33年	25歳	・ 下田歌子の推薦により横浜の大同学校教師として赴任。大同学校は、清国人居留民子弟の学校である。日本人の女性教師による日本国内で最初の清国人学校教育
全 35年	27歳	・ 上海の務本女学堂教師として赴任。横浜港より上海へ。下田の2回目の推薦による。小田切総領事の信用を得る
全 36年 (1903)	28歳	・ 北京内田公使の招きにより北京に出発。9日間のラバ轎（きょう）の旅。カラチン王府着。王妃と共にイク正女学堂を開校。最初のモンゴル人女子対象の普通教育の学校とされる
全 37年	29歳	・ 日露戦争開戦（2月）。カラチン王府の日本援助のための裏面工作にあたる。情報その他各種の援助をする
全 38年	30歳	・ カラチン王の参勤に随伴して北京入り ・ 日露戦争は日本の勝利で終戦
全 39年 (1906)	31歳	・ カラチンイク正女学堂三少女の留学生を伴い北京を出発し帰国。三人は実践女学校（下田歌子校長）に入学。操子の後任には鳥居きみ子（徳島県出身）が赴任する ・ 一宮鈴太郎（横浜正金銀行ニューヨーク副支店長）と結婚

		・夫と渡米しニューヨークに在住・・・17年間
大正10年	46歳	・ニューヨークより帰国
昭和20年 (1945)	71歳	・熱海にて死去(3月7日)

3、下田歌子との出会い

教育家。本姓は平尾鉦(せき)。宮中に仕え、歌才を認められ、昭憲皇太后から歌子の名を受けた。実践女学校の創設。学習院創設に伴い、教授となる。

操子は、小学校高等科から県立長野師範学校に進んだ。その後長野で小学校につとめている時、日清戦争が始まる(明治27年)操子は、中国理解のためにも、もっと学問をつまなればと考えた。県知事の推薦で、女子高等師範を受験し合格した。しかし在学中の勉強の無理がたたって体をこわし、中退することになった。父のもとに帰り静養していた。幸い回復は早く、ちょうど新設された長野県立高等女学校からのぞまれて教職についた。



その頃日本の女子教育界の第一人者として下田歌子がいた。下田歌子は、早くから中国問題に関心を寄せていた。日本で初めて中国人留学生20名を受け入れたのも、歌子の実践女学校であった。明治33年(1900)8月19日、講演旅行で諏訪地方を訪れた下田歌子と面会し、そこで清国の子女教育の希望を伝えた。下田の推薦で横浜の大同学校(清国人居留民子弟の学校。名誉校長は後の首相犬飼毅)に赴任。明治35年には下田の2回目の推薦で、清国上海の務本女学堂に赴任する。下田との出会いが、父の教えを、そして自分の希望をかなえたことになった。

4、揺れる評価

操子は、20代の若さで、モンゴルのカラチン王府に招かれて、王家の教育顧問として新設の女学堂の教師になり、単身で重大な任務を背負って大陸奥地まで行った。操子の任務の一つは、カラチン王府に女学堂を創設して、女子教育の道を開く仕事である。もう一つは軍事機密に関わる役目も背負っていた。明治36年11月29日北京に着き、内田公使より入蒙についての官命を受ける。「・・・日露間の風雲急迫して、いつ砲音聞くに至るやも図りがたく、その際カラチンにありて軍事の裏面に働く女性が必要なれば、その大任にも服するように・・・」と告げられた。

それ故、操子には「密偵」「教育者」「烈女」「烈婦」「日蒙親善の母」・・・などと様々な呼び名が付けられている。ということは様々な評価がなされていることを物語っている。「・・・諜報・謀略工作には女性の役割を軽視できない。その第一号が操子・・・」「・・・植民地化教育の実行者・・・」「・・・戦争協力者・・・」「・・・侵略戦争の協力者・・・」「・・・モンゴル人女子留学生の大恩人・・・」「・・・内モンゴルの教育と文化の発展への功労は大きい・・・」等々の評価である。明治の時代に生きたこと、当時の国際情勢を考えての評価をしていかねばならない。今後どのような評価がされるであろうか。